

# 0歳児組における保護者が作成した 『ぶーちゃん人形』を用いた「親と子がつながる保育」

A Study of Childcare for making Parents and children's good human relationships.  
Using "Boochan doll" which parents of babies in toddler class, made by themselves.

丸山アヤ子※ 谷田部章子※※ 奥山伸※※※ 藤田啓子※※※※ 木村佳実※※※※※ 中村早紀※※※※※※

**要旨** 本論で取り上げた保育園（以降、本保育園とする）は、「親と子がつながる保育」を行っている。このテーマで研究を始めたきっかけは、最近の保護者が自分の子どもに関心が薄く、自分の生活や仕事を優先にしていることが気になっていたからである。子育ては、全ての動物にとって種として命をつなぐための大事なイベントである。特に、人間は、社会人として一人前に育てる重要な役割がある。

2013年から本保育園では、親子関係を密にすることのきっかけづくりとして「保護者が子どものためのおもちゃを作り、保育園でそれを使って遊ぶ」をテーマに0～6歳児クラスで始めた。0歳児クラスは園が指定した『ぶーちゃん人形』を保護者に作ってもらい、保育の場面で活用した。その結果、『ぶーちゃん人形』を使った保育の中での効果として二つの効果が見られた。一つは、子どもの成長発達に効果をもたらしたこと、すなわち、『ぶーちゃん人形』を介して子どもたちの情緒が安定し、親子関係が密になり、保護者・子ども・保育者の人間関係が深まった。二つは、保護者自身が作った『ぶーちゃん人形』を介した遊びの中で子どもの成長する姿を実感し、家庭一子ども一保育園のつながりの中で保護者の生きる力となったことである。このことを保護者支援の視点から考察した。

【キーワード：保育園(所) 0歳児 おもちゃ 保育士 保護者支援】

## 1. はじめに

近年、保育園では「気になる保護者」が増加している、と言われている。例えば、国立特別支援教育総合研究所の久保山、齋藤らの2009年の調査<sup>1)</sup>によると、公立保育所は「子どもに無関心」(20%)、「保護者中心」(9%)、「乱暴」(7%)、「保護者の病気・病的状態」(9%)のカテゴリーが顕著であることが明らかであり、幼稚園ではそれぞれ8%、2%、3%、1%と比較的低かった。一方、幼稚園の保護者は、「子ども観」(15%)、「不安・心配」(14%)、「過保護」(12%)、「園に無関心」(10%)のカテゴリーが、高い割合を示した。公立保育所ではこれらのカテゴリーの占める割合はそれぞれ6%、1%、5%、2%と低かった、との結果であった。これ

らを比較すると、公立保育所の「気になる保護者」は、基本的な子どもの存在そのものを否定しかねない深刻な内容と思われる。

また、藤後・坪井ら(2010)の保育園における『気になる保護者』の現状と支援の課題―足立区内の保育園を対象として―によれば、気になる保護者のカテゴリーとして「子どもに無関心」「保護者中心」「乱暴」「保護者の病気・病的状態」を挙げている。これらは、保護者の子どもへのネグレクトや身体的虐待等、虐待の要素・素因がある、と言っても過言ではない<sup>2)</sup>、としている。

さらに金山(2014)は、「気になる保護者」の特徴として、「行事予定や提出物などを把握していない53.5%」「おたよりや連絡帳を読んでいない

---

※ 丸山アヤ子 埼玉純真短期大学特任准教授  
※※ 谷田部章子 認定こども園品川区五反田保育園園長  
※※※ 奥山 伸 認定こども園品川区五反田保育園副園長  
※※※※ 藤田 啓子 認定こども園品川区五反田保育園0歳児担任  
※※※※※ 木村 佳実 認定こども園品川区五反田保育園0歳児担任  
※※※※※※ 中村 早紀 認定こども園品川区五反田保育園0歳児担任

44.4%」「子どもの身なりや持ち物に気を使わない47.1%」と多い数字を示していること、具体的行動として「送迎の際もスマートフォンを常に操作している」「忘れ物が多い」等を指摘している。また、「子どもを怒鳴ったり激しく叱ったりする44.9%」「子どもを叩くなど不適切な扱いをする35.6%」の数値を示した<sup>3)</sup>。

筆者らは、最近の保護者の傾向として、自分の子どもに対する関心が薄い、という傾向が気になっている。そこで、保護者が子どもに関心を持つきっかけとして、子どもの為に「手作りおもちゃ」を作ってもらい、それを保育園の日常的な保育活動に活かしたい、と考えた。保護者が作ったおもちゃを使って保育園で遊ぶことが、これまでの経験から3つの効果として保護者支援につながることを予測したからである。ここでいう保育所の「おもちゃ(玩具)」とは、寺島(2005)が述べているように保育所の子ども達の遊びに用いるもので、固定的なもの・移動可能なもの、つまり、比較的大きな遊びものを『遊具』とし、子どもが気軽に持ち運びできるものを『玩具』としている<sup>4)</sup>。

一つは、現行の『保育所保育指針解説書』(2008)第3章1.(2)ウ環境では、「子どもは、身の回りに用意された玩具や遊具や生活用具に興味関心」を持ち、「自分から物や人に関わってこうとする自発性を育てていくようになる」<sup>5)</sup>としている。また、寺島(2009)は「子ども達が発達していくのには、玩具(おもちゃ)や道具があった方がより発達していくこと」<sup>6)</sup>をねらいとし、子どもの全面发展に大きく関与していることを保護者に理解してもらおうこと、と考えた。

二つは、おもちゃの中でも、特に手作りおもちゃの効果について、林(2011)は、保護者の作った手作りおもちゃが「温かみ・温もりがある」「個々の発達・育ちに合ったものが作れる」「個々の興味関心・大きさに合った使いやすいものが作れる」と述べている等、3歳未満児には手作りおもちゃの意義が大きいこと<sup>7)</sup>、と考えたからである。

三つは、保護者が手作りでおもちゃを作り、それを使うことにより、おもちゃを媒介とした親子関係が深まることを目標とした。親と子がつながる(親子の愛着が深まる)保育を進めたい」「保護者が愛情を込めたグッズを使い、わが子がいきい

きと遊ぶ姿や成長につながっているということ、もっと伝えたい」という筆者らの強い思いから、子どもの身近にあり、子どもが使える、常に関わる物、保育活動の中で活かせる物、どの保護者も簡単に子どもの為に作れる物として「手作りおもちゃ」を作ることとした。

本研究で0歳児を取り上げた理由は、昨年、平成28年8月「保育所保育指針改定の中間報告」が社会保障審議会児童部会保育専門委員会より提出され、その方向性の挙げられている大きな柱の一つが、0～2歳児を中心とした保育所利用児童数の増加による「乳児(0歳)・1歳以上3歳未満児に関する記載の充実」を主たる柱として位置付けている<sup>8)</sup>ため、0歳を対象とする本研究の意義は極めて高いと考えたからである。

しかし、2017年3月7日における国立国会図書館NDL - OPACのキーワード検索結果は、次のとおりである。「保護者支援」183件、しかし、「0歳児」を加え、「保護者支援+0歳児」1件、「乳児+保護者支援3件(うち1つは乳児院)であった。同様に「おもちゃ+保育」で論文検索すると35件、「おもちゃ+保育+0歳児」0件、「おもちゃ+保育+乳児」4件であった。現在、先行研究の論考が極めて少ない。

一方、「0歳児+保育+おもちゃ」の図書は26件、うち、手作りおもちゃの作り方に関する物が21件ある。保育現場では、0歳児の手作りおもちゃを作っているのに、それを実際保育場面で使った研究がほとんど無い、その研究が極めて少ないことに着目し、本研究を進めるきっかけとなったのである。

本保育園では、2013年度(3年前)から「親と子がつながる保育」として研究をしてきた。当時、0歳児クラスで保護者が作った人形で遊んだことがあったが、大きさ、種類、素材がバラバラであったため、子ども同士の関わりの親密さに発展しなかった。そこで、今回は、0歳児組における保護者が作った布おもちゃを『ぶーちゃん人形』としたのである。この布おもちゃを選定した理由は、ハリー・ハーローのアカゲザルと二つの母親の人形を使った実験に着目し、「接触の快適さがなにもまして重要」であり、愛情関係が形成される重要なカギである<sup>9)</sup>と考え、柔らかく、感触の良い木綿布(靴下)を選んだ。

## II. 対象と方法

### 1. 対象：0歳児クラスの子どもとその保護者

保育園全体5クラスで研究した（0歳・1歳・2歳・3歳・4歳・5歳）中で、本研究では、0歳児クラスの研究を対象にした。その理由は「0歳児の子どもは、初めて家庭から離れ、保育園入園し、保護者が作ったグッズ（おもちゃ）を心の杖としてその役割を果たせる」と予測したからである。

### 2. 研究期間：2015年4月1日～2016年3月31日

### 3. 倫理的配慮及び確認

対象者・保護者等が特定できないように、発言の趣旨が変わらない程度の軽微な改変をした。写真は保護者の了解を得ている。また、作品展にお

ける「保護者の声」の内容については、保護者の確認を得ている。

### 4. テーマの設定

0歳児クラスによるおもちゃテーマは、保護者が子どもの為に木綿布（靴下）で作る『ぶーちゃん人形』とした。『ぶーちゃん人形』と決めた理由は、筆者らが「子どもの手で握れるくらいの人形」と提案したこと、担任の「保護者をイメージできる柔らかい素材」、「色は淡い色として『ピンク・白』のどちらかを選び、「形が簡単で保護者が作り易い」人形と決め、長さ15cmの『ぶーちゃん人形』とした。

### 5. 保育計画

0歳児組担任保育者が以下のような計画を立てた。

おもちゃ『ぶーちゃん人形』（以下、『ぶーちゃん』とする）を使った保育計画

| 保育計画       | テーマ「すきすきぶーちゃん」                                                                                                                                                                                           | 保育の形態：低月齢・高月齢のグループ別保育                                                                                                                                                                                            |
|------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 0歳児クラスの到達点 | <p>〈心身の健康〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>心地よい体験で（スキンシップ）安心・安定する。</li> <li>快と不快の感情が分化する。</li> <li>這うことや立つこと、伝え歩きや一人歩きなどをする。</li> <li>室内や戸外で探索活動を十分に作る。</li> <li>自分から口を開けて食べようとする。</li> </ul> | <p>〈言語〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>語りかけに応答し、喃語やしぐさで表現する。</li> <li>繰り返しの言葉を理解する（バイバイ・いないいないばあなど）。</li> <li>喃語や片言を受け止めてもらい、保育者とのやりとりを楽しむ。</li> </ul>                                               |
|            | <p>〈人間関係〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>信頼する人と見なれない人を区別する。</li> <li>大好きな大人との触れ合いで愛着が芽生える。</li> <li>友達の持っている物をじっと見つめたり、動きを目で追ったりする。</li> </ul>                                               | <p>〈表現〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>泣いたり、笑ったりすることで、気持ちを表す。</li> <li>歌や音、音楽を聞いて楽しんだり、音に合わせて体を動かすことを喜ぶ。</li> <li>名前を呼ばれると自分のことだと分かり、意思表示をする。</li> <li>保育者の歌や手遊びを楽しんで聞き、真似をして手や体を動かそうとする。</li> </ul> |

【0歳児組保育計画における保育士の留意点】子どもが自主的に楽しく遊べる環境設定のポイント

#### (1) 人的環境

・保育者が一緒に触れ合ったり遊んだりしながら「『ぶーちゃん』と遊びたい」と思える雰囲気をつくるができているか。親（保護者）の手作りの『ぶーちゃん』に親しみをもって触れ合えるような援助ができたか。

・子どもが遊んでいる場面で保育者が適切な位置に居て「子どもが遊びたい」という気持ちになるような声かけや援助をしているか。子どもの遊びや友だちとのやりとりを発展させるような援助ができているか。

・子どもの気持ちを受け止め、子どもの成長にあった言葉かけをしているか。子どもが思いや考えを発信した際、共感して応答しているか（子ども

もに不適切な声掛けや援助がないか)。

- ・家へ『ぶーちゃん』を持ち帰った時の遊び方の提示等、保護者と子どもとのやりとりを楽しめる援助ができたか。

## (2) 物的環境

- ・子どもが『ぶーちゃん』と遊びたい時、自由に遊び、利用しやすい環境が整っているか。
- ・『ぶーちゃん』遊びが発展できるような教材が揃っているか。
- ・子どもの発達に見合った遊び方ができているか。教材が年齢に適しているか。
- ・整理整頓され、安全を考慮した環境設定になっ

ているか。

## 6. 期ごとの研究内容・成果・課題について

テーマ「子どもが自発的に遊べる環境設定」：0歳児組の意図的な環境設定による保育実践と成果・課題

<ねらい>

- ・手作りの『ぶーちゃん』を通してスキンシップや触れ合い遊びをする中で、保護者と関わりも深める。
- ・『ぶーちゃん』と年間通して一緒に過ごすことで人形と仲良くなれる。愛情が持てるようになる。

## 【1期：4～6月：保護者へ「ぶーちゃん」人形作成依頼～子どもが園で遊ぶ様子を伝える】

(1) 4～5月：担任4名で保護者にどのような物を提案するか検討し、決める。

- ・人形の大きさ：子どもが片手で持てる大きさ。
- ・人形の肌触り：柔らかい布に綿を入れること。
- ・人形の色：ピンクか白(園が豚のイメージに合った色を指定)。保護者はピンクか白のどちらかを選ぶ。  
：色の心理的影響も考慮した(ピンクは、心を満たし、人を思いやる温かさ、白は素直・純粹・清潔・無垢のイメージがある)<sup>12)</sup>。

- ・人形の形：保護者が作り易い単純形(本体の周りを縫い裏返し綿を詰め、目と口を縫いつける簡単作業)

(2) 6月：保護者に『ぶーちゃん』人形作成の依頼をし、保護者に『ぶーちゃん』を園へ持参してもらう。

- ・保護者への説明：子どもにとって「保護者が作った人形」で遊ぶことは、「おかあさん、おとうさんと一緒」の気持ちを促し、安心して遊べる。人形で遊ぶと手指の発達・人間関係を促す効果がある。
- ・子どもへの影響：自宅で保護者が一生懸命人形作りをしている姿を見ている。
- ・持参した『ぶーちゃん』(図①)は、箱の中に入れて保管、子どもが遊ぶ時に渡す。



図1『ぶーちゃん人形』

(3) 0歳児組の子どもの『ぶーちゃん』遊び

- ・にぎる、舐める、口に入れる、投げるなど感触を楽しんでいる。
- ・『ぶーちゃん』を箱から取り出して、ポイッと投げる遊びが多い。
- ・『ぶーちゃん』が握りやすい大きさ・柔らかさであったので遊びやすく良い。

(4) 『ぶーちゃん』遊びの課題

- ・1歳の誕生日を過ぎた子ども2名がソファの上に立ち上がり『ぶーちゃん』を持ったまま、後ろの棚の玩具や本を取ろうとし、バランスを崩し、危険のため注意が必要であった。
- ・『ぶーちゃん』を持ったまま、子どもが床に転がって遊ぶ状態が多かった。

これらの点を改善する必要がある。

※0歳児にとっての「自発的に遊べる環境」とは何か、の課題について①「意欲的に楽しんで遊べる環境」②自分で玩具を取り出せ、ソファに乗らない環境が必要③じっくり遊べる環境づくり④発達に合った遊び方や遊びやすい環境を整える等、担任が話し合った改善策が出された。

### 1期：靴下で作った『ぶーちゃん』で遊ぼう！

1期の特徴の一つは、おもちゃの選定である。布（靴下）で作った同じ形の誰でも知っている動物の「ブタ」としたことである。乳児期は、五感（視覚・聴覚・嗅覚・触覚・味覚）の発達が著しいため、五感に働きかけ、感受性を増大<sup>10)</sup>させるおもちゃを選ぶ基準とした。特に、触覚（感触）を大事に考えた。真宮（1999）は、乳児の場合、中に綿を入れ柔らかい布を使用すると子どもに安心感を与える効果があるもの<sup>11)</sup>と述べている。更に、視覚として「形が単純で認識しやすい」「誰もが知っている」「親しみのある動物」をキーワードとし、ブタの形とした。また、色を「ピンク」「白」の2色としたのは、豚のイメージに合った色、色の心理的影響も考慮した。また、座位の安定化、二足歩行等に伴い、手指が自由に使えるようになり、物の操作の発達が著しくなり、物を掴むとき、掌全体を用いて掴む時期～指を使う巧緻性が高まる時期<sup>13)</sup>であり、自らの「片手」で操作でき、片手の掌（てのひら）全体を使い、自由に使える大きさのおもちゃとした。

二つは、保護者の理解・協力を得ることである。子育てと仕事で生活に余裕のない保護者が、子どものために時間を割き、子どものための手作りおもちゃを作るためには保護者の理解・協力が欠かせない。保育者は、朝夕の送迎時間を活用し、0歳児の発達にとって布おもちゃを作る意義を説明し、理解を得るよう努力した。色は、保護者の選択に任せ、「自分の子どものおもちゃ」を認識するよう促した。保護者への配慮として、容易にできるよう、園から『ぶーちゃん』の形に切った「靴下」、「中に入れる綿」及び「作り方レシピ」を渡し、作れない時は「いつでも申し出て下さい」と話した。結果、全員の保護者が手作りで『ぶーちゃん』を作って、保育園に持参することができた。

三つは、おもちゃ環境への配慮を挙げたい。西川・永田（2010）は、おもちゃを与える際の0歳児における配慮事項の1位を「安全面」としている<sup>14)</sup>。子どもがソファの上に立ち上がり『ぶーちゃん』を持ったままバランスを崩したので速やかに改善し安全を確保した。

### 【2期：7～8月：『ぶーちゃん』の置き方の工夫～『ぶーちゃん』と一緒に遊びの変化】

#### （1）7月上旬：環境の改善による遊びの変化

- ・ソファを畳部屋へ移動、ソファがあった处を遊びスペースとした。
- ・ソファ裏になっていた下から2段目の棚を活用し、『ぶーちゃん』を、透明のウォールポケットに入れ、子ども達がいつでも自分達で取り出せる下段に設置した（ウォールポケットを突っ張り棒で固定）（図②）

#### ①子どもの遊びの変化

- ・『ぶーちゃん』を「ポイッ」と投げる姿の減少がみられた。
- ・生まれの早い子どもグループは、自分の『ぶーちゃん』が分かるようになってきた。
- ・生まれの遅い子どもグループは、床に寝転がっている状態が減り、保育者が『ぶーちゃん』を渡すと、持ち歩くようになってきた。
- ・いつでも自分で『ぶーちゃん』を取り出せるため、いろいろな遊びに『ぶーちゃん』を使う姿が見られた。「物を介した自分・他者との3項関係遊び」が出現した。

#### ②今後の『ぶーちゃん』遊びの課題

- ・保育者は、子どもへ『ぶーちゃん』といっぱい遊ぶと楽しいことを見本を示しながら一緒に遊ぶ。
- ・保育園で子どもが『ぶーちゃん』と沢山遊んでいる様子を保護者へ伝え、子どもへの関心を持つよう働きかける。

#### （2）7月中旬～8月：「ぶーちゃんといつも一緒！」の遊びへ変化

#### ①「ぶーちゃんといつも一緒！」に遊ぶ園での姿



図2 『ぶーちゃん』ウォールポケット

- ・「散歩」へ行くとき、いつも一緒に連れて行く姿が見られた。
- ・「水遊び」「プール」の時、子どもは『ぶーちゃん』を水の中に入れ、一緒に遊んだ。
- ・夏祭りの製作に取り入れた。

## ②家でも「いつも一緒！」

- ・自宅に『ぶーちゃん』を持ち帰り、家族で遊ぶ姿が見られるようになった。

## ③「ぶーちゃんといつも一緒」成果

- ・『ぶーちゃん』への愛着が芽生えた子の出現が見られた。

## 2期：「安全確保」の環境づくり・ぶーちゃん」と いつも一緒！の子どもの姿

2期の特徴の一つは、ソファを移動し、いつでも『ぶーちゃん』を出して遊べる環境づくりに配慮したことである。そこで、ハイハイ・伝い歩き・2足歩行それぞれの発達により、遊びの広がりや移動して自分から他者と関わろうとする姿が見られ、『ぶーちゃん』を連れてどこにでも行く姿が見られるようになった。二つ目は、『ぶーちゃん』を使った遊びへの配慮として、担任が優しく抱き上げる、抱っこをする、寝かせる、椅子に座らせる、話しかける等、『ぶーちゃん』を「人間」として扱うような動作見本を示すよう心掛けたことである。結果、『ぶーちゃん』を「ポイッ」と投げる姿がなくなり、どこでも連れていく友達と認識し、散歩に行くとき「ぶーちゃんも一緒に連れて行こう」、「プールと一緒に入れよう」と誘うと特定の親しい他者「友達」としての認識の芽生え、「自己」－「物」－「他者」の3項関係が芽生え、いろいろな遊びに混ざるようになった。

この過程は、生後4ヶ月頃から乳児が「他者への注意と反応」を示すようになり、5ヶ月頃になると「物との関わり」として積極的に周りの対象を見て手を伸ばし、掴む・なめる・たたきついたりして対象に働きかけるようになり、6・7ヶ月頃から「物への興味」が芽生え、物を媒介として乳

児と他者の2者の注意を結びつけるようになる「二項関係」後、「三項関係」が生まれるのである<sup>15)</sup>。更に「ぶーちゃん」を一般的な「他者」でなく、特定の親しい「他者」として区別するようになった。そこで、どこでも“『ぶーちゃん』と一緒に”の子どもの姿が見られるようになったのである。

三つ目は、保護者との関わりにおける『ぶーちゃん』の位置づけと役割の変化が見られたことである。担任は、子どもと『ぶーちゃん』の写真を見ながら保護者と楽しさを共感しあえる関係づくりを目的とし、『ぶーちゃん』と一緒に遊ぶ子どもの様子を「写真」で掲示し、保護者に見てもらった。朝晩の送迎時を利用し、担任は保護者とともに写真を見ながら子どもの様子を具体的に話すように心がけた。そして、自宅へ『ぶーちゃん』を持ち帰り、家庭でも遊ぶよう勧めた。すると、これまで、子どもとあまり遊ばなかった保護者が『ぶーちゃん』を持ち帰ったら子どもと一緒に遊ぶ時間が増えた』『ぶーちゃん』を作るのは大変だったけど、こんなに喜んで遊んでくれるなんて思ってもみなかった」「父親と子どもとの関わりが増えて、コミュニケーションが豊かになった」など、朝晩の送迎時の保護者との会話の中で『ぶーちゃん』との関わりを報告する保護者の増加が見られるようになった。

## 【3期：9～10月：保護者会で『ぶーちゃん』の紹介～保護者手作り「ぶーちゃんの家」～引き車遊び・ままごと遊びへ】

(1) 9月〇日 保護者会開催『ぶーちゃん』遊びの紹介をする。

①保護者一人一人に、自分の作った「ぶーちゃんを紹介」してもらう。

②保育園から保護者へ

- ・子ども達が遊ぶ様子についてエピソードを含め、紹介した。
- ・回数の違いがあっても家へぶーちゃんを持ち帰って遊ぶ家庭が増えた、と報告した。

③保護者同士の交流と成果

- ・保護者同士が『ぶーちゃん』を作った時に工夫したこと、苦労したこと等を話し合い、共有することが

できた。

- ・『ぶーちゃん』を自宅に持ち帰り、遊んでいる様子等を知ることができた。
- ・保護者の子どもへの思い、子育てに苦労している様子、考え方、就労の様子を知ることができた。
- ・第2子を育てている先輩ママからの助言もあり、子どもの将来の姿をイメージできるような交流ができた。

(2) 9月〇日「生まれの早いグループ：1歳誕生日過ぎの子ども」の公開保育：A保育士園内研究保育  
「ぶーちゃんと一緒にままごと遊び」

①生まれの早いグループの子どもの様子

- ・自分の『ぶーちゃん』に、スプーンで食べさせる真似ができる子ども、自分が食べるマネはできるが、『ぶーちゃん』に食べさせる真似のできない子ども、とハッキリと分かれた。

②「ぶーちゃんと一緒にままごと遊び」の評価

- ・自分が大人からして貰った経験を『ぶーちゃん』に再現が出来る子とできない子どもがいることが分かった。

③クラス担任として今後の課題：

- ・『ぶーちゃん』に食べさせる真似ができなかった子どもへの関わり方、保育者としてどう関わるか。
- ・『ぶーちゃん』を使った遊びを、今後の保育の中でどう発展させるか。
- ・自分の『ぶーちゃん』にあまり興味を示さない子どもにどのように働きかけていくか。



図3 『ぶーちゃん』に食べさせる真似



図4 『ぶーちゃん』に食べさせる真似を繰り返す子



図5 保育者の援助で『ぶーちゃん』に食べさせる真似をする子

(3) 9月下旬「ぶーちゃんの家」ができたよ！「パパ・ママ、忙しいのに頑張った～！」

①担任は、全員の保護者へ「一人一人の『ぶーちゃんのお家』を作ってください」と依頼。

- ・全員の保護者の了解を得、それぞれ個性あふれた『ぶーちゃんのお家』を園に持参した。
- ・今まで育児にかかわってこなかった父親が『ぶーちゃんのお家』作りに参加する姿が見られた。
- ・父親が「ぶーちゃん」を使って子どもと一緒に遊ぶ姿が見られた、と母親も大喜びの家庭もあった。

②園での工夫として、保護者の作った『ぶーちゃんの家』を子どもがすぐ取り出せる位置に置いた。

- ・保育者は、保護者会・連絡帳で『ぶーちゃん』と遊ぶ園の様子を具体的に保護者へ伝えるように心掛けたのも『ぶーちゃんのお家』作りを促す大きな要因と考えられる。



図6 お家の中に寝ている



図7 お家から出して遊ぶ

(4) 生まれの早いグループ・保育者が、『引き車』を5  
台作成。

- ①『ぶーちゃん』を引き車に入れて遊ぶ姿
  - ・『ぶーちゃん』を車に乗せて移動して遊ぶ姿が見られた。
- ②引き車に乗せた『ぶーちゃん』へ配慮して遊ぶ
  - ・『ぶーちゃん』が車から落ちないように気を付ける子どもの姿が見られた。
  - ・車がぶつからないように、他の子どもの動きを気にするようになった。



図8 『ぶーちゃん』  
を引き車に乗せたけ  
ど倒れちゃった～



図9 『ぶーちゃん』を乗せて散  
歩!引き車が倒れないように気を  
付けなくちゃ～

(5) 10月〇日「生まれの遅いグループ：7ヶ月～1歳の子どもの」の公開保育：B保育士園内研究保育  
「ぶーちゃん」を使ったやり取り遊び

①生まれの遅いグループの子どもの様子：「ぶーちゃんとおままと遊び」

- ・保育士が見本となり、転がし箱や型ぬき箱、容器や箱を使って遊んだ。
- ・保育士や友達が遊んでいる様子を見て、近づいてきて、やってみようと真似をして遊び始めた。
- ・子ども達がおままとの道具（箱や容器）におもちゃを入れたり、出したりを繰り返して楽しむ姿があったので、自分の『ぶーちゃん』も一緒に遊びに混ぜ、親しみを感じながら触れ合って遊べるように配慮した。



図10 『ぶーちゃん』とおままと遊び

②「ぶーちゃんを介したやり取り遊び」の評価

- ・握る・舐める・口に入れるなどの感触遊びから脱却し、『ぶーちゃん』を介して、おもちゃのやりとりをする等、「人との関わり遊び」への変化が見られた。『ぶーちゃん』を人として認識し、抱っこしたり、おんぶしたりする姿が見られるようになった。
- ・「ぶーちゃん」を仲間に入れて、いろいろなおままとの道具（お茶碗・皿・鍋）を用いながら「おままと遊び」をしているなど、遊びが広がった。

③クラス担任として今後の課題：「人との関わり遊びが楽しい」と実感できる遊びに発展させる

- ・保育者との触れ合い遊びを充実させ、手指を使う遊びをどう設定していくか。
- ・ハイハイの子どもは、おもちゃを使って大人とのやりとりを喜ぶ姿が見られるようになったが、家庭での遊びをどう充実していくか。

(6) 連絡帳からの一コマ

担任～保護者へ

- ・保育園で「ぶーちゃん」と遊ぶ様子を保護者へ報告
- 〇月〇日：今日は、園で『ぶーちゃん』と一緒に遊びました。穴の開いた箱にぶーちゃんを落としたり、筒の中に入った『ぶーちゃん』を引っ張って位置の移動を楽しむ姿や『ぶーちゃん』と「にぎにぎ」握手して感触を楽しみました。
- 〇日の担任からの返事：家でのエピソード有難うございます。『ぶーちゃん』とそんな風に遊んでくださっているのはすごく“嬉しい”です。『ぶーちゃん』に「愛着」が湧いてきたようですね。

保護者～担任へ

- ・お家で『ぶーちゃん』と遊んでいる様子
- 〇月〇日：昨日、主人が『ぶーちゃん』にリボンのヘアゴムを耳に付けてM子に渡したら大喜びしていました。でも、リボンに触ったら「ぶーちゃん」の耳が取れてしまい…「ダー！（つけて!）」と主人の所へ持っていきました。今日も元気です。



○月□日：今日は、『ぶーちゃん』を「さんぽ、行く」と引き車に乗せて遊ぶ姿が見られました。引き車から『ぶーちゃん』が落ちないように力の加減をしてコロコロ引いていました。

○月△日：○日の担任へ返信：園で『ぶーちゃん』を車でコロコロ遊ぶ姿、とっても楽しそうですね！おうちでも『ぶーちゃん』を見せると、嬉しそうに遊んでくれるので本当に嬉しい！時間がかかったけど作ったかいがありますね！カンタンなのに“すごい”

### 3期：特定の親しい友達としての『ぶーちゃん』との関わりの親密化

3期の特徴の一つは、『ぶーちゃん』を使った遊びの変化、『ぶーちゃん』を使ったやりとり遊び「ままごと遊び」の出現である。1歳前後から、子どもは空のコップに口を付けて水を飲むようなしぐさをしたり、人形にご飯を食べさせるふりをしたりといった「あたかも～であるかのような行為」をし始める<sup>17)</sup>。神谷・吉川（2011）は「単なる見立て遊びではない。ごっこ遊びの始まりともいうことができるふり遊びは、1歳半ごろから見ることができる。ごっこ遊びの基盤となる能動的な模倣行動は1歳前後でも見られる。この頃の子どもたちは、大人の行為をよく観察しながら食べる「ふり」や飲み物をコップに注ぐ「ふり」をして楽しんでいる<sup>18)</sup>」としている。このふり遊びは、乳幼児期の代表的な遊びの一つであり、身近な大人と共有される<sup>19)</sup>。『ぶーちゃん』に食べさせる真似ができなかった子どもへの関わり方として「食べる真似」の始まる1歳児前後であるかを確認する必要がある、と考えた。1歳に満たない子であれば、1対1の大人との関わり遊びを増やしたのち、前述のように三項関係の構築に努めることが大事と思われる。あまり興味を示さない子どもには、『ぶーちゃん』を「人」として扱い、「○○ちゃんのぶーちゃんは、目が大きいね」と特徴を言語化することで「自分の『ぶーちゃん』」の自覚を促す。ミルクを飲ませる、食べさせる真似等の動作見本を示すことが

できたと考えた。

二つは、『ぶーちゃん』を連れた移動である。吉澤・大滝（2008）は、「ごっこ遊びは、『場をつくる』『役になる』『物をつくる』『演じる』という四つの要因によって成立し、それが同時にごっこ遊びを展開するための『力』になっている。この四つの要素があるところにごっこ遊びが生まれるのではないか<sup>20)</sup>」と述べている。『ぶーちゃん』の位置の移動が、「場」の設定になったのだと考える。また、『ぶーちゃん』を乗せたので車から落ちないか、倒れないか、様子を見ながら引く力を加減する姿があり、体のバランスの発達にも影響した。

三つは、保護者との関わりにおける「保護者会」「連絡帳」の意義について述べてみたい。2期では、保育所から一人一人の子どもの様子をそれぞれの保護者へ『ぶーちゃん』を介して成長する姿を伝えることを主とした。3期、9月の「保護者会」では、保護者一人一人が皆の前で『ぶーちゃん』を紹介し、工夫したこと、苦労したこと等を話し合い、共有することができた。加えて、保護者の子どもへの思い、子育てに苦労している様子、考え方等、保護者同士が語り合うことで「情報の共有」ができ、第2子を育てている先輩ママからの助言もあり、子どもの将来の姿をイメージできるような交流ができたのは、有意義であった。また、連絡帳に家庭で『ぶーちゃん』と遊ぶ記述が増えたのも3期の特徴であった。

### 【4期：11月～1月：癒しの「ぶーちゃん」～「ぶーちゃんの家」の常設～保護者会・作品展へ

#### (1) 11月～12月：体調の悪い時の「ぶーちゃん」の役割

##### ①子どもの体調が悪くなった時

- ・担任は『ぶーちゃん』を手渡し、『ぶーちゃん』の存在が保護者をイメージできるような言葉掛けを意識的に心掛けた。
- ・子どもの様子：体調の悪い時に『ぶーちゃん』を手渡すと握り締めたり、抱きしめて布団に入る姿があった。

##### ②『ぶーちゃん』を手渡した成果：『ぶーちゃん』に癒される子どもの姿があった。

- ・担任のねらい通り、『ぶーちゃん』の存在が「安心の拠りどころ」になってきた。
- ・子どもの気持ちが落ち込んだり不安になった時、保護者の作ってくれた『ぶーちゃん』が保護者をイメージできる存在となってきた。



図11 棚に『ぶーちゃん』を入れたお家を展示)



図12 保護者作成の家に『ぶーちゃん』を寝かせて入れている子

## (2) 1月上旬：生まれの早い1歳半過ぎのグループは、「ぶーちゃんの家」を常設

### ①遊び終えた『ぶーちゃん』は家の中に片付けられる環境設定にした。

- ・子どもの姿：「家」を自分で棚から取り出し床に置き、『ぶーちゃん』を入れて遊ぶようになった。

### ②おままごとごっこ：1歳半を過ぎ『ぶーちゃん』を使った見立て遊びが盛んになった。

- ・「おままごと遊び」：食べ物の玩具を『ぶーちゃん』の口に付けて食べさせているつもりになったり、保育者がするのを真似、布団に寝かせる様子が見られるようになった。

## (3) 1月中旬：地域の高齢者施設での交流会に、初めて『ぶーちゃん』を連れて行ったよ！

### ①子どもの様子：月一度実施の高齢者との交流に『ぶーちゃん』を持って行く。

- ・これまでの交流会では、高齢者の方々に人見知りする姿、保育者から離れられない姿が見られたが、今回、初めて安心できる存在となってきた『ぶーちゃん』を連れて行き、触れ合い遊びができた。
- ・『ぶーちゃん』をずっと離さず握りしめ、心の糧の存在だった。

### ②大好きなママと一緒に参加した気持ちだったように感じた。

## 4期：「ぶーちゃんと仲良し！」特定の親しい友達としての『ぶーちゃん』との関わりの親密化

4期の特徴は、『ぶーちゃん』への愛着の深まりであった。自分の体調が悪くなり、布団に入って横になり、保護者のお迎えを待っている時、保育士が『ぶーちゃん』を手渡すと、握りしめたり、布団の中へ一緒に入ってほっぺたをくっつけ、担任のねらい通り、『ぶーちゃん』の存在が「安心の拠りどころ」になってきた。愛着行動パターンを形作ったり、象徴水準の自己表象や他者表象あるいは防衛機制にもつながっていくと考えられている<sup>20)</sup>。人形遊びは、人形を介した自己の気持ちとの相互調整とそれが自己調整に及ぶのである<sup>21)</sup>。

子どもの気持ちが落ち込んだり不安になった時、

保護者の作ってくれた『ぶーちゃん』が保護者をイメージできる存在となってきた。結果、『ぶーちゃん』への愛着が深まったのである。

## (4) 作品展・保護者会2月20日

### ①保護者会：一年間の「ぶーちゃん」と関わる中で成長した子どもの姿を話し合った

#### 〈話し合われた内容：保護者からの話から〉

- ・最近では少しずつ言葉を理解してきているので、『ぶーちゃん』と関わることで子どもとやりとりすることが楽しくなってきた。
- ・言葉が出るようになって友達の名前を言えるようになり、誰の『ぶーちゃん』か、を教えてくれるような姿を見ると、保育園生活を楽しんで

いることが分かった。

②作品展で保護者の声：保護者をインタビューしたことをまとめると以下のとおりになる。

- ・A君の母親：「入園して『ぶーちゃん人形を作ってください』と先生から言われた時、『働きながら子育てをして大変なのに！』と心の中で思った。けれど、この子が保育園で私の作ったぶーちゃんを大事にしてくれている、と分かった時、正直嬉しかった。家に持ち帰っても遊ぶ姿をみて『作って良かった～』と思った。ぶーちゃんのお家はパパが一生懸命作ってくれた。ぶーちゃんのお蔭でパパも子育てに参加するようになったと感じる。」
- ・A君の父親：「いつも仕事で忙しくしている。子どもとの関わりも少ない中、『ぶーちゃん』と遊ぶ姿を写真で伝えてくれ、園の様子が分かって嬉しい。そんな時、『ぶーちゃんの家』を作るよう妻から頼まれ、Aの好きな乗り物をテーマに作った。園で息子がぶーちゃんのお家として遊んでくれているので嬉しい。父親としての役割が果たせた気持ちだ。」
- ・B君の母親：「私は保育園を全面的に信頼している。『ぶーちゃん人形を作ってください』と言われた時も『この子のため』と思って作った。園でぶーちゃんです遊ぶ子どもの姿を細かく知らせて下さっているので安心。自分が子育てに自信が無いので、いつも先生方に相談できて嬉しい。この保育園に入園出来て感謝している。」
- ・Cちゃんの母親：「この子が赤ちゃんの時、どう遊べばよいのか分からなかった。保育園に入り、『ぶーちゃん』を作ったばかりの時は放り投げたり、『ぶーちゃん』を乱暴に扱っていた。そのうち、『ぶーちゃん』と一緒に遊ぶようになって子どもとの遊び方が分かってきた。ご飯を食べさせる真似をしたり遊びに変化が見られるようになった。園が連絡帳や写真を使って子どもの様子を伝えてくれるので、家でも同じように遊ぶことが出来てとても良い。」

### Ⅲ. 考察

ここでは、働きながら子育てをしている保育園の保護者が、自分の子どものために手作りしたおもちゃ『ぶーちゃん』を使って楽しく遊んでいる

子どもの姿を通して子どもに関心を持ち、一緒に遊ぶようになり、保護者が変容していくという研究結果が得られた。『ぶーちゃん』人形を介在させた保護者の変容についての考察と保育園・保育士の意図する保護者支援の二つから考察していきたい。

#### 1. 『ぶーちゃん』人形介在の保護者支援による保護者の変容

1期、担任から保護者へ『ぶーちゃん』を作るよう依頼したが、「仕事が忙しいのに面倒」「裁縫は苦手だから無理」と感じる保護者が大勢いた。中でも、前述のインタビューに応じてくれたA君の母親は「仕事と子育ては大変。なんでこんなもの作らなくてはならないの？」と感じていた。しかし、園の担任からの熱心な説明で、裁縫の苦手なA君の母親は、しぶしぶ『ぶーちゃん』を作り、園へ持参した。A君が「保育園で母親の作った『ぶーちゃん』を大事にしてくれている、と担任からの説明で分かった時「正直嬉しかった～」と感じた。さらに、2期・3期になると、A君が家に持ち帰って遊ぶ姿をみて「作って良かった～」との思いになった。加えて、園から依頼された『ぶーちゃん』のお家づくりを父親が一生懸命作ったことに母親が驚いた。殆ど子どもと関わりが無かった父親の変化は、母と子、父と子、そして、母と父と子と3人で『ぶーちゃん』を介して遊ぶ姿をもたらした。『ぶーちゃん』が父親の作った家から「行ってきます」と出ていき、「ただいま」と帰る「ふり遊び」、そして親子3人と『ぶーちゃん』が一緒にお風呂にはいたりする姿が見られるようになったのである。猪谷・増田（2003）は、「遊びが子どもの生活そのものであるとすれば、それを支援する用具としての『おもちゃ作り』は、生活支援用具の作製である用具（おもちゃ）の工夫や導入によって、ユーザーである子どもの生活を楽しくし、情緒的な安定を図り、親子関係の改善にもつながっていった」<sup>22)</sup>と述べている。まさにこのことを実感した。

Cちゃんの母親の場合、第1子のため、子育ての方法が分からず、「この子が赤ちゃんの時、初めてなのでどう遊べばよいのか分からなかった」が、保育園に入り、大変な思いで『ぶーちゃん』を作った。しかし、「うちの子は、『ぶーちゃん』を放り投げたり、乱暴に扱っているので悲しい気持ちに

なった」と語っていた。しかし、『ぶーちゃん』にご飯を食べさせる真似をしたり、寝かせたり、一緒に遊ぶようになってから「子どもとどう遊べばよいのか、だんだん分かってきて良かった」と今までの子育てを振り返り、『ぶーちゃん』の果たす役割が大きいことに気付いたのである。これは、保護者支援として重要な役割を果たした、といえるのではないかと考えた。

## 2. 保育園0歳児クラスにおける「保育者が保護者に伝える」という保護者支援～「送迎時の会話」「連絡ノート」～

本保育園は、朝7時30分から22時までの延長保育を実施しており、職員のローテーションによる保育を実施している。0歳児組の保護者と会う機会が少なく、担任として園の様子を知らせる工夫をしている。

その一つが、園全体で取り組んでいる写真の掲示である。0歳児は、自ら園の様子を知らせる手段としての言葉の発達が未熟である。子どもの送迎時、担任をはじめ、園長、副園長も含め、子どもの遊ぶ姿の写真を見ながら、子どもの様子を一人一人丁寧に語っているのは「保護者との連携無くしては、子どもの発達はない」との園のこだわりがあってこそ、である。実際、A君の父親は、写真を見て「ぶーちゃんと遊ぶ姿を写真で伝えてくれ、園の様子が分かって嬉しい」と「ぶーちゃんの家」作りのきっかけになったのである。

二つは、日々の連絡ノートのやり取りである。保育所における連絡ノートで子どものエピソード記述があると、保護者は、保育園での自分の子どもの姿を容易にイメージすることができる。亀崎(2015)は、保育所と家庭という子どもにとっての2つの生活の連続性を支えるために重要な役割を果たしている<sup>23)</sup>と述べている。連絡ノートで、日々情報交換を行うことは、丸1日24時間の子どもの情報の共有であると同時に、保育士と保護者をつなぐ重要な保護者支援でもあり、「子ども育児日記」としても保存できる、と考える。

この「ぶーちゃん人形」によって、子どもの母親のみならず、父親をも動かし、変えることができた。それは、保育者にとっても大きな驚きであり、喜びでもあった。

このような保護者を変革できる保育のあり方に

ついて検討し、生み出していくことが望まれる。

## IV. おわりに

今回、0歳児組における保護者が作成した『ぶーちゃん人形』を用いた事例を取り上げ研究した結果、『ぶーちゃん人形』を介して子どもが楽しく遊ぶ姿と人間関係の広がりが見られた。そのことが、保護者支援となり「親と子がつながる保育」ができた、と考えた。あらゆる場面で保護者に子どもの様子を伝え、励まし、保護者の様々な相談に真摯に寄り添う園全体の保育者像が見えてきた。

これは、「質の高い保育者」を育てる研修が充実しているからこそ、であり、今後、本園を主管している区の「保育園研修制度」のさらなる充実に向けて研究を深めていきたい。

## 【謝辞】

本研究作成に当たり、ご協力くださった保育園教職員の皆様、快く連絡帳・アンケートにご協力くださいました保護者の皆様に心より感謝申し上げます。

## 引用文献・注

- 1) 久保山茂樹・齊藤由美子・西牧謙吾・當島茂登・藤井茂樹・滝川国芳(2009):「気になる子ども」「気になる保護者」についての保育者の意識と対応に関する調査—幼稚園・保育所への機関支援で踏まえるべき視点の提言—国立特別支援教育総合研究所研究紀要36PP55-76
- 2) 藤後悦子・坪井澄子・竹内貞一・府川昭世・佐々木圭子(2010):「保育園における「気になる保護者」の現状と支援の課題—足立区内の保育園を対象として」東京未来大学研究紀要3pp85-95
- 3) 金山美和子(2014):「「気になる保護者」に関する保育者の意識と支援」長野県短期大学紀69pp167-173
- 4) 寺島明子(2005):「乳幼児の保育環境—手づくり遊具・玩具の効果—(一考察) 松本短期大学研究紀要(14),69-82
- 5) 厚生労働省編(2008):『保育所保育指針解

- 説書』フレーベル館pp8,
- 6) 寺島明子 (2009):「日本玩具(おもちゃ)の歩み--手づくり玩具の出現から商品化までと保育施設における役割」松本短期大学研究紀要(18),95-101
  - 7) 林陽子 (2011):「3歳未満児保育室における手づくりおもちゃに関する調査研究」中部学院大学・中部学院短期大学研究紀要 第12号
  - 8) 内閣府・厚生労働省 (2016):「保育所保育指針改定の中間報告」社会保障審議会児童部会保育専門委員会
  - 9) 三宅茂夫 (2012):『新時代の保育双書保育内容人間関係』(株)みらいpp48-49ハリー・ハーローのアカゲザルと二つの母親の人形を使った代理母の実験
  - 10) 白石正久・白石恵理子 (2010):『教育と保育のための発達診断』全国障害者問題研究会出版部pp45
  - 11) 真宮美奈子 (1999)「子どものコミュニケーションを豊かにする布おもちゃに関する保育学的研究 I -タオル人形とその教育的価値について-」中九州短期大学論業25 (1) pp35-49
  - 12) 注: <http://iro-color.com/episode/about-color/pink.html>「色カラー色彩を中心とした通信サイト」幸せな気持ち, 優しい気持ちになる柔らかい優しい印象をもつ桃色は女性的なイメージが強くあります。心や体に満ち足りた気分をもたらしてくれます。
  - 13) 前掲 10) PP49-50
  - 14) 西川ひろ子・永田彰子 (2010):「保育所における乳児のおもちゃ環境と保育の配慮に関する研究」安田女史大学教育総合研究所年俵(6) pp84-88
  - 15) 児山隆史・三島修治・樋口和彦 (2015)「乳児の共同注意関連行動の発達-二項関係から三項関係への移行プロセスに注目して-」教育臨床総合研究14 99-109
  - 16) 宮井清香・安永啓司・亀田隼人・小家千津子・伊藤良子・藤野博・橋本創一 (2012-2-29) 知的障害のある幼児の人間関係の発達を促す遊びの実践研究(1) 人形遊びの教育的効果について-東京学芸大学紀要.総合教育科学系.63 (2) p.197-203
  - 17) 大塚穂波 (2015):「乳幼児期のふり遊び研究の動向と展望」神戸大学大学院人間発達環境学科研究紀要9 (1) 45-55
  - 18) 神谷・吉川 (2011):「幼児の役割遊びにおける役割取得の特徴に関する研究-5歳児のごっこ遊びの成立過程-」埼玉大学紀要 教育学部,60 (2):19-28
  - 19) 石谷真一 (2013):「人形遊び技法におけるナラティブの共同構築過程」神戸女学院大学論集60 (1),pp53-74
  - 20) 吉澤千夏・大瀧ミドリ (2008):「1歳児のままごと遊びにおける「食べる」「飲む」に関わる母子の表出スロット」文京学院大学人間学部研究紀要Vol.10,No.1,pp.21-36,
  - 21) 石谷真一 (2014):「人形遊び技法における作話の共同構築過程のコード化と幼児の対人適応との関連」神戸女学院大学論集61 (2),pp33-50
  - 22) 猪谷生美,増田安代 (2003):「入院児とその母親へ手作りのおもちゃを使用した援助効果について:小児看護実習における遊びの援助を通して」九州看護福祉大学紀要5 (1),215-223,
  - 23) 亀崎美沙子 (2015): 保育士養成課程における「保育相談支援」の教授法に関する検討-保育相談支援の一形態としての連絡帳に着目して-松山東雲短期大学研究論集.vol.45,no.p.1-9